

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、  
熾熱燈の光の晴れがまし王もやくなし、今宵は夜毎にこゝに集  
ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残れるは余一人  
のみなれば。五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官  
命を蒙り、このセイゴンの港まで來し頃は、目に見るもの、耳  
に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記し  
つる紀行は日ごとに幾千言をかなしけむ、當時の新報に載せら  
れて、世の人にもてはやされしかじ、今日になりておもへば、  
穉き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さ  
ては風俗などをさへ珍しげにしるしを、心ある人はいかにか  
見けむ。こたびは遂に上りしとて、日記ものせむとて買いし冊  
子もまだ白紙のまゝなるは、獨逸にて物學びせし間に、一種の  
「ニル、アドミラリイ」の氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、  
これには別に故あり。げに東に還る今の我は、西に航せし昔の  
我ならず、學問こそ猶心に飽き足らぬところも多かれ、浮世の  
うきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更なり、  
われとわが心さへ變り易きをも悟り得たり。きのふの是はけふ  
の非なるわが瞬間の感觸も、筆に寫して誰にか見せむ。これや  
日記の成らぬ緣故なる、あらず、これには別に故あり。嗚呼、  
フリンガイシイの港を出でより、はや二十日あまりを経ぬ。  
世の常ならば生面の客にさへ交を結びて 旅の憂さを慰めあふ  
が航海の習なるに、微恙にことよせて房の裡にのみ籠りて、同  
行の人々にも物言ふことの少きは、人知らぬ恨に頭のみ悩まし